

津波の記憶刻む震災遺構

石巻・大川小

心に傷 保存議論まだ先

今も続く避難遅れ検証

東日本大震災による被害を後世に伝える「震災遺構」。大津波で破壊された建物や、時に乗り上げた船舶など。児童、教職員計8人が死亡、行方不明となった宮城県石巻市の大川小学校には慰霊碑が建ち、花を手向ける人が絶えない。素直な賛否をさらす南三陸町の防災対策庁舎は、遺族の感情や保存費用の問題もあり、解体が決まった。9月末、仙台市で開かれた「マスコミ倫理協議会全国協議会・全国大会の被災地視察」に参加し、宮城、岩手両県沿岸部の「遺構」の両辺を訪ねた。群青色の秋の空の下、歩いた現場は愛した人々をくした痛みの記憶に満ちていた。

(論説編集委員・森六典理)

歩



秋にしては日差しが強し、河口から約4キロ、がらんぽい雑草が生えた足元を、とした荒れ地に大川小の思い出が刻まれる。北上川、校舎は立ってはいない。

がれきは片付けられ、時折、建設資材を積んだトラックが過ぎていく。校舎の残骸に、柱に覆われた小山が見える。子供たちは裏山に逃げて無事とばかり、思っていました。

同小6年だった次女を津波で亡くした佐藤敏郎さん(50)の声が低い。隣の女川町立女川中、防災教育を担当する教員でもある。

地震発生から大川小に津波が到達するまで51分。大津波警報が出て、高台への避難を呼び掛けられていたにもかかわらず

「命を教つたための情報時間、手動、すべてあつた。検証のための活動に積極的にかわる人がいれば、「さらしものになりたくない」と距離を置く人もいます。

大川小の悲劇は、マスコミを通じて広がった。県内外から多くの人々がやって来るようになり、今も献花が絶えない。だが「外」からの無数の視線が、時に遺族の心を設立させるのも確かだ。

夏に完成した御影石の慰霊碑は毛に遺族がお参りし、一般の人が献花する場合は別に設けられている。校舎前で写真を撮っていく人を見るとつらい、という話も聞いた。

ず、教職員と児童は校庭にとどまった。到達の直前、新北土大橋たもとに

向かって、避難行動を起したことが分かってい

「でも(自分は)子供に先生の言うこと聞くな、なんて言えないですよ。罪えない！」佐藤さんの目に涙がにじんだ。

一口に遺族と言っても、立場や思いはさまざま。検証のための活動

だが「51分の空白」を埋める作業が続く大川小では、校舎の扱いを議論する状況にはない。今も日々、大川小に通って折る家族がいる。傷はいまだに生々しく、深い。

佐藤さんは思う。「大川小はね、私たちにとって単なる遺構じゃない。子供たちの思い出がたくさん詰まった母校でもあるんです」

バスの中で、佐藤さんからもらった冊子を渡した。『破が通いたかった中学校、それが私の職場でもあります』。震災が起きてから、生徒一人一人の姿が「命」そのものに見えてきたという。

大川小の前に訪れた女川町では、女川中の3

中生が津波の恐ろしさを「1000年後に伝える」取り組みを発表してくれた。町内にあるすべての町の津波到達点に、石碑を設置するのだという。

その一人、木村圭さん(14)は「中学卒業後も活動も続けて、20歳までに石碑を順番に設置していきたいです」と話した。

「20歳というと、将来ほんごんな仕事をしたいですか」と聞くと、少しは

「14は「建築士です」と答えた。未来へ向かう夢そのものと思える、すこやかな笑顔だった。



宮城県石巻市の大川小の校舎前で裏山を指さし、津波の状況を説明する佐藤敏郎さん(中央) 11月27日